

#アニマルセラピー
#犬の気持ち
#犬用fMRI

【当該研究の状況】

当該研究では、動物介在療法(AAI)の3つのセッションを行った際、9匹のセラピー犬がストレスの兆候を示さなかったことを明らかにしている。しかし、セッション中に優位性行動が増加したことも明らかになっている。観察はセッション前47時間、中81時間、後46時間の計174時間実施した。セッションは抱きしめ、ブラッシング、アジリティーコースの誘導、車椅子患者向けのボールやビスケット投げである。

【先行研究への問題意識】

この研究ではストレスに焦点を当てすぎており、犬の気持ちを考慮した研究はされていない。人中心に物事を捉えすぎているのではないか。

【RQ】外見や仕草では判断しきれないセラピー犬の気持ちを明らかにする。

【RQに対する仮説】犬用fMRIを小型化したものをセラピー犬の頭や首に装着し、脳波を調査することで犬の感情を読み取ることができるのでは？

【研究目的】本研究は、先行研究のような活動に犬が嫌悪感を抱いていないのかを明らかにすることが目的である。

【研究内容・方法】

1. セッション前後に従来の固定型犬用fMRIを用いる。
2. セッション中に先行研究のようにセッションと観察を行う。

【考察】

頭や首にfMRIを装着したいが、現在の技術では難しい。そのため上の方法を考えている。この方法で調査を行うことで、少し劣るが、ある程度データを補うことができると考える。それに加え、犬用小型fMRIが開発されることで、トレーニングされていない犬でも簡単に調査を行うことができるとも考えている。

【今後の課題】

現在、犬に装着しないタイプのfMRIが開発済されている。しかし、現在の技術では、身体に装着するタイプのfMRIが開発できない。そのため、セッション中に脳波のデータを得ることができないことが大きな課題である。

【参考文献】

<https://www.mdpi.com/2076-2615/9/10/833>